

夢の通ひ路

倉橋由美子

講談社

夢の通ひ路

由美子

講談社

夢の通ひ路

一九八九年二月二〇日 第一刷発行

著者——倉橋由美子

© Yumiko Kurahashi 1989, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽三—三—三 郵便番号二三 電話東京〇三—四三—二二(大代表)

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

定価——二二〇円(本体一一六五円)

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

夢の通ひ路
目次

花の下 7

花の部屋 15

海中の城 23

媚薬 31

慈童の夢 39

永遠の旅人 47

秋の地獄 55

城の下の街 63

花の妖精たち 71

月の女 79

遁世 87

雲と雨と虹のオード 95

黒猫の家 103

赤い部屋 111

水鶏の里 119

蛭狩り 127

紅葉狩り 137

蛇とイヴ 163

春の夜の夢 183

猫の世界 197

夢の通ひ路 213

装幀 倉橋三郎

倉橋由美子作品集 夢の通ひ路

花
の
下

夜が更けて犬も夫君も子供たちも寢静まつた頃、桂子さんは化粧を直して人に会ふ用意をする。誰にも話してゐないことであるが、それは別に秘密にしておく必要があつてのことではなくて、話す必要がないので黙つてゐるだけのことである。大体、別の世界があつてその人たちと付き合つてゐるといふやうな話を理解してもらふのは、考へただけでもむづかしい。

桂子さんは鏡の中の自分の顔を見た。そしてそれが夜の化粧のせゐで、妖^{あや}しい燐光を放つ「あちらの世界」の顔に化けてゐることを確かめると、外に来てゐる人の気配に應じて立ち上がり、家を抜け出した。文字通り、壁も扉も意のままに通り抜けていくのである。

庭に出ると、月の光を浴びて佐藤さんが立つてゐた。「お待ちせしました」と月並みな挨拶をしてから、桂子さんは会釈を返した佐藤さんが影も曳かずに歩きだしたのに気づいた。なるほどと思つた時には自分も影がなくなつてゐる。通りがかりに犬のオドラデクの頭を撫でてやつたが、よく眠つてゐて目を覚ます気配もない。あちらの世界へ出掛ける時には、かうやつて

こちらの世界に自分の体が残つてゐないことを確かめてみるのである。

前々からの約束で夜桜を見ることになつてゐた。桂子さんの家の庭にも花盛りの桜がある。染井吉野だから、見上げると、花だけが白い妖気を漂はせて雲のやうに夜空に広がつてゐる。

「かういふ桜は人を狂はせますね」と佐藤さんが言つた。桂子さんも賛成だつた。この花の下で満月の夜を明かしたら、月光と花の精との相乗作用で間違ひなく狂氣にとりつかれるだらう。

「昔の桜は山桜だつたんでせう」と言ひながら桂子さんは謡曲の「西行桜」に出てくる嵯峨野の庵室の桜を想像した。それが佐藤さんにもすぐ伝はつたらしく、

「よろしかつたら行つてみますか」と微笑を浮かべて桂子さんの手を取ると、佐藤さんは簡単に時間と空間を横切つた。二人は嵯峨野の庵室の庭にゐた。

迂闊な話ながら、桂子さんは佐藤さんが西行であつたことを改めて思ひ出した。とはいふものの、西行、あるいは佐藤義清（のりきよ）といふ名前はこの佐藤さんには余り似合はないと思ふ。時々桂子さんのところに訪ねてきたり街で会つたりしてゐる佐藤さんは端正な顔をした長身瘦軀の人で、洒落たツイードのジャケットなどを着てゐて、どんな仕事や職業とも縁のなささうな紳士だつた。桂子さんよりは明らかに年上だとしても、年齢は不詳、実は大変な長生きをしてゐる人のやうでもあり、それでゐて年寄りじみた様子は全然見えない。特にその奇麗な手は年齢も性別も超えてゐて、何百年も花と月と雪を相手に遊び暮らしたのでなければできあがらない優

雅さを漂はせてゐた。

佐藤さんは桂子さんの手を握つたまま、

「いかがですか、ここの桜は」と言つた。

「西行様のお好みらしい山桜ですね」と言ひながら、桂子さんはもう一方の手を重ねて佐藤さんの手を包むやうにした。西行の名を出したことが気恥づかしくもあつたのである。

「西行はともかく、桜はやはりかうして花と葉の混じつたのがいいぢやありませんか」

その通りで、この桜の老木が、無数の繊細な花と葉をつけた枝を広げて、つややかに光る霞のやうな花の笠をかぶつてゐる姿には、不思議な優しさとともに豪壮さがあつた。それが佐藤さん、いや西行上人の姿に重なるやうだつた。

「庵室の花は花一本、我一人、眺むる者も眺めらるる者も我と花とより外にはなしと思ひしに」と佐藤さんは「西行桜」の一節をつぶやいた。「佳人と二人、夜桜の下にゐるとなればまづ……」

「お酒ならここにあります」

桂子さんは佐藤さんの手の中の薄紅の盃に酒を満たした。その盃を飲みほして返しながら佐藤さんは桂子さんの目を見つめた。尋常な人の目ではなかつた。その目に見つめられると、体が液状になつて、酒か何かのやうに飲みほされてしまひさうで、恐ろしさの混じつた甘い陶醉に襲はれた。

「あなたも今夜は花が開いたやうな顔をしてゐる。いつぞやは雨の晩に宿を貸していただくとしたら、涼しい顔で断られてしまつたが」

「私を遊女の誰かさんとお間違へるやうでしたから」

「さう、あれは確か妙と言つた」

「西行様は出家なさつたあとも色好みは収まらなかつたやうですね。ですから『源平盛衰記』にも、発心の動機も実は恋にあつたのだらう、などと書かれたりするのです」

「あれは当たつてゐない。本当は簡単なことです。宮仕へを止めて、好き勝手に生きていかうと思つただけですよ。何しろ、あのあとは大變な乱世に入つた。自慢ではないが、私にはいささか先を見る目があつた」

「数奇の遁世、といふわけですか」

「数奇とはむづかしいことをおつしやる。まあ、物好きといふことでいいぢやありませんか。幸ひ財産は十分あつたので、山川花月、それに佳人を相手に、遊んで暮らすことができただけです」

「うらやましいわ」

「当時もさう思つた人は少なくなかつたやうだ。例へば、女のくせに私の真似をして東に西に歩き回つた人もゐた」

「『とはずがたり』を書いた二条といふ方でせう」

「さうです。久我雅忠の娘で、あれもなかなかの佳人だった」

「お会ひになつたんですか」

「勿論。彼女が亡くなつてこちらにやつてきてからのことですがね。今度紹介してあげてもいい」

桂子さんは花にも酒にも酔つて陶然とした目で傾いた月を見た。

「この花の下で眠りたくなつてきました」

「私もそれを考へてゐたところだ」と佐藤さんは言つた。

「眠ればどうなるでせう。満開の花に靈魂を吸ひ取られてそのまま死んでしまひさう」

「やつてみますか」

佐藤さんはこの時はつきりと僧形の西行になつた。さう桂子さんは感じながら、このまま花の下で死ぬのなら、あの歌の通りになる、と頭の隅で考へてゐた。

『願はくは花の下にて春死なむ　そのきさらぎの望月の頃』……あなたはこの歌の通りになさつたんでせう。なぜそんなことができたのか……御自分で息を止めておしまひになつたみたい」

「いや、簡単なことですよ。さつきあなたがおつしやつたやうに、桜の木の下で眠つただけのことだ」

その声を聞きながら桂子さんは西行の胸に抱かれてゐた。人間のものとは思へない胸であ

る。「あなたは誰？ 桜の精？」と口に出さうとしたが声にならない。そして相手の声は自分の体の中で聞こえてゐた。もう自分も相手も溶け合つて区別がつかない。これは妖木だ、妖木に吸ひ取られて、あの黒い幹の中に閉ぢこめられてしまつた、と桂子さんは感じる。吸ひ取られたのは体か靈魂か、その両方なのか、それもわからないまま、桂子さんは桜の木の中の樹液に溶けこんでゐた。あるいは樹液そのものになつたと言つても同じことだらうか。桂子さんは鮮やかな緑の液体になつてゐる自分を感じた。

快いざわめきが聞こえてくるのは、無数の靈魂たちの語り合ふ声のやうに思はれた。佐藤さんに尋ねてみるとさうだと答へる声が返つてきた。

「ここには桜の木に吸ひこまれた靈魂が集まつて、おしやべりをしたり、愛の契りちぎを交はしたりしてゐる……」

「私たちのやうに」と桂子さんは小さく喜びの声を上げた。長く続くこの陶酔は、何もかもが緑の液体になつての交はりにふさはしく植物的な性質のもので、肉の交はりにありがちな動物的な狂乱とはおよそ縁がない。ゆるやかな時間の流れとともに陶酔は深まり、静かな歡喜に身をふるはせるかのやうに桜はとめどなくその花を散らした。

佐藤さんにまた送つてもらつたのか、途中のどこかで別れたのか、記憶はさだかでない。自分の部屋でよく眠つて、犬の声と子供たちの声で目が覚めた時は春の光が窓の外に溢れて、庭は宝石箱をひっくり返したやうな気配だつた。

「お母さん、桜の木が裂けてゐる」

庭に出てみると、驚くほどの落花で、殊に桜の老木のまはりには厚い花の褥じふになつてゐた。思はず「夜来風雨の声」といふ句が頭に浮かんた。

「血が流れてゐみたい」と女の子が言つた。

「緑の血だ」

無残に裂けた老木の幹から、それこそ血のやうに、緑の樹液が流れ出て、細かい泡を立てながら花びらを染め、黒い土に吸ひこまれていく。桂子さんは、これがゆうべの歡樂の果てなのだらうか、あの嵯峨野の西行上人の桜は実はこれだつたのだらうかと思つた。

「なんだか氣味が悪い」

それに対して桂子さんは、「ゆうべの雨と風は随分ひどかつたのね」とだけ言つて、死んだ桜のために合掌した。

いつのまにかやつてきたオドラデクが尻尾を振りながら、流れる樹液をしきりに舐なめてゐる。「およしなさいよ」と子供が叱ると、犬は驚いたやうに向きなほり、それからくるりと一回転して、後脚で首のあたりを掻きながら長い欠伸あくびをした。こんな日曜日の朝に、夜の間に起こつたことを逐一話すのはやはりむづかしい。桂子さんも犬に倣なまつて大きな欠伸をした。